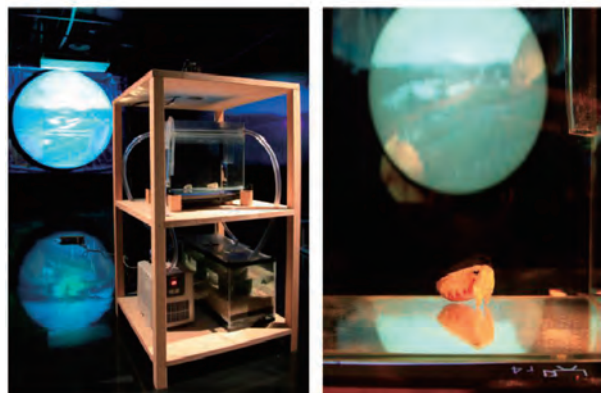


Ryuta Nakajima “Amburghese di cuore” (2013)

アメリカ在住の Ryuta Nakajima (中島隆太) は、イカやタコなどの頭足類に関する、突っ込んだ生物学的研究をしながら、独自の表現を探究している気鋭のアーティストだ。彼は、状況に応じてイカやタコなどの頭足類が体表を変化させる性質を、アーティストが世界を解釈して表現する行為に重ね合わせ、生態観察や実験をしつつも常に「表現の本質とは何か」「自然と人文的世界観を巡る思索」に関わる制作を長年続けてきた。

表紙作品は、Minneapolis Institute of Art との共同で行われた一連の写真作品の一点。美術館に保存されている伝統的ないし宗教的な絵画や資料を高解像度で出力した写真を底面にして、その上に置かれた水槽内でイカが体色を変化させた模様を撮影し、作品化したものだ。イカの環世界に思いを馳せつつ、人々が培ってきた文化や宗教と、世界を認識し、身体で表象するイカの有りようを重ね合わせ、人間の意識や精神活動・表現活動を新たに捉え直すことはできないか、という探究の一環のプロジェクトだ。表題の “Amburghese di cuore” は、「根っからのハンブルク人」という奇妙なラテン語だ。評者の理解では、ハンブルク出身の美術史家・美学者 Aby Warburg が自らを評した言葉の一節に由来している。最近執筆された Nakajima の学位論文を読むと、彼がヴァールブルクの西洋美術史解釈を、美術が単に線形的に発展したものでも、個々の芸術家の創造の産物だけとして捉えるものではなく、「視覚と解釈を伴う、ある種の科学的な一般性を前提に発展してきたもの」として読み取っていることがわかる。それを、作家自らの学際的な活動（ある種の自然科学的観察・実験と美学的な思考や美術表現を往復する活動）のベースとして捉えているようだ。

このプロジェクトに先行して、Nakajima は専門の海洋研究者たちと組んで本格的なイカの行動・画像解析を地道にこなすことで体表変化に関する定性的かつ詳細なカタログを作製し、基礎生物学的にも価値のある研究論文を発表している。下に示す「イカラボ」は、実際に作者自らが設計した展示用機材を備えた水槽の中でイカを生体展示し、その体表変化をリアルタイムで壁面にプロジェクトレーションするバイオメディアインスタレーション作品の展示の様子である (Ryuta Nakajima “CEPH LAB (イカラボ)”, 沖縄こどもの国, 2012)。こうした実験・観察によって得られた成果を、独自の思索を伴って美学的に展開し、本シリーズとして発表したり、膨大な古今の名画や様々な画像の上に置かれた水槽の中でイカがどう振舞うのかを記録・分析し、作品化してきた。興味深いことに、この方法論を「ゾンビ」の画像分析と表現に応用したプロジェクトなども手掛けている。Nakajima の表現・実験探究世界は、いわゆるメディアアートともサイエンスイラストレーションとも異なるタイプの「自然科学とファインアートの往復モデル」として独自の貴重な例と言えるだろう。



Ryuta Nakajima

美術家、研究者、僧侶。ミネソタ大学ダールズ校芸術学部准教授(絵画)、沖縄科学技術大学大学院 OIST 客員研究員、博士(芸術工学)。生態学、行動学、進化生物学的な研究も手掛けており、その美学的な解釈を交えた学際的な作品の発表や研究成果を報告している。論文に “Can I Talk to a Squid? The Origin of Visual Communication Through the Behavioral Ecology of Cephalopod” や “Cephalopods Between Science, Art, and Engineering: A Contemporary Synthesis” などがある。

(文責・表紙デザイン編集：岩崎秀雄)